

シルクロードの臍、カシュガル調査から

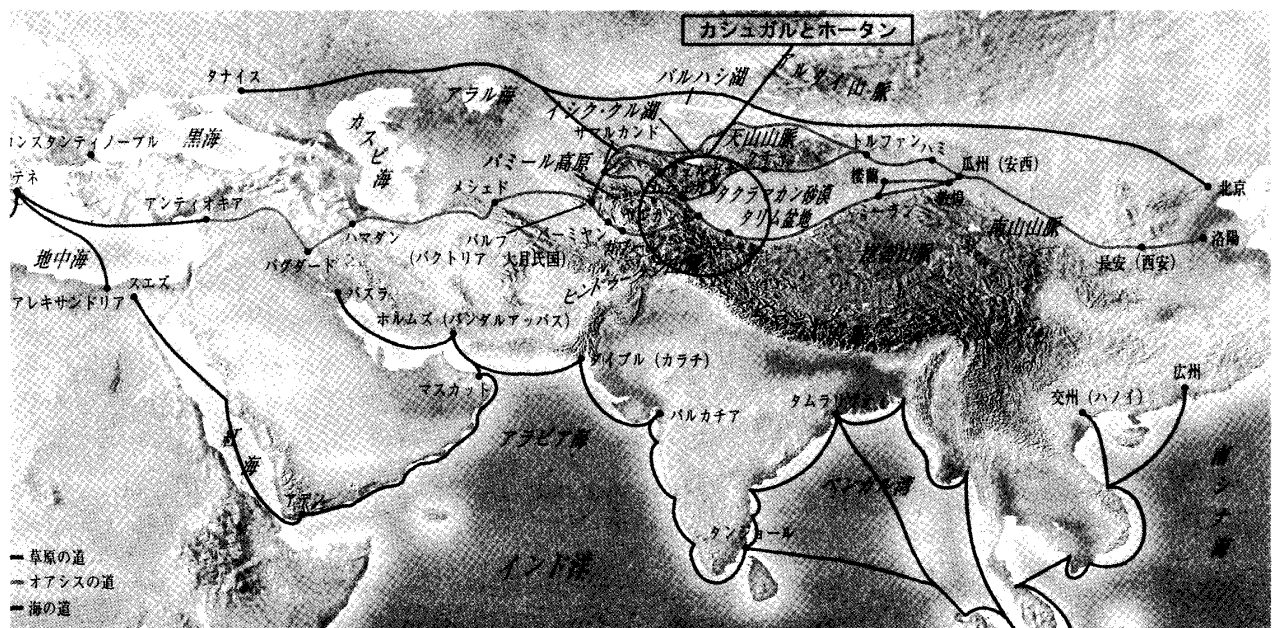
原 隆一

大学の研究仲間（多田博一先生、新納豊さん、風間純子さん）と一緒にこの2年ほど、中国の西域、タクラマカン沙漠西南部辺に位置する新疆ウイグル自治区のカシュガルとホータンに行っている。初めて訪れたのが1995年の夏だから、今回で3回目となる。

イランを中心とする調査研究をしている私が、中国くんだりまで足をのぼしているのはそれなりの理由がある。それは、なら・シルクロード学研究センターから委託された「カシュガル地方の伝統的生産・生活用具—シルクロードを通じる移転・受容・開発の史的過程—」（2000年～2001年度）という長たらしい名前のフィールド調査を主とした研究プロジェクトのためである。

そのねらいは、異なった自然環境や生態資源に適応するかたちでオアシス農民、都市民、牧畜民などが、それぞれの在来技術をもって対応する民衆の生活技術の歴史や相互影響の跡を中国、中央アジア、インド、ペルシア文化圏というそれぞれの大文化圏が相互に交わるユーラシア大陸の上に位置づけ、その具体層を明らかにしようとする試みである。この目的から、シルクロードの東西ルートと南北ルートが交わるカシュガルという地点にねらいを定め、この地域を歩くようになったわけである。

ちなみに、ウイグル地方は圧倒的な力をもつ漢文化圏のなかにあつて、トルコ語系統の言語を使い文字はアラビア語で表現し、



地図 シルクロードの臍カシュガルとホータン

出所：『アーキオ』（1999年8月）

宗教はイスラム教である。中国の中にあるもうひとつの中国である。

パキスタンと中国の国境になっており、富士山より1000mほど高いフンジュラブ峠（4700m）を陸路カラコルム・ハイウェイで、3回ほど越えたことがある。パキスタンからは、インダス川上流の渓谷沿いにギルギット、フンザを経てフンジュラブ峠を越え中国側のタシュクルガンに入る。

中国側の山岳地帯はイラン系タージク族の生活圏であった。国境の町、タシュクルガンから夏でも雪を頂いたパーミールの高峰がすぐ近くに見える。世界の屋根といわれるパーミール高原には、ヒンドゥークシュ、カラコルム、ヒマラヤ、崑崙、天山といった巨大な褶曲山脈の各支脈が四方八方から流れ込んでいる。また、この地域は中国、アフガニスタン、パキスタン、タジキスタン、キルギスタンなど多くの国々の接合部分になっており、いわばシルクロードの臍である。

タシュクルガンで農家を訪問したが、そこには炬燵があり、また、春分の日ノウルウズと呼んでいるゾロアスター教時代からの正月を祝う新春行事があり、太陽暦のイラン文化圏であることを思い起こさせた。



写真1 カシュガルからタシュクルガンに向かう山岳地帯にあるタージク族の墳墓。後方にコンゲール山（7719 m）とカラクリ湖の一部が見える（2000年夏）

また、老人とペルシア語が通じたのは嬉しかった。ここもまた中国であった。

イラン系タージク族が住む山岳地帯から下る高原地帯には日本の田舎のおじさんにそっくりのキルギース族がヒツジやヤクを放牧していた。さらに、タクラマカン盆地に向かって下ると、ポプラ並木が美しいカシュガル・オアシスが目に入ってくる。そこには、トルコ系ウイグル族が漢族と混住している。

このように、異なった地形と高度差による自然・生態環境に適応するかたちで牧畜、農業、手工業、商業などの様々な生業が営まれてきた。地形や気候といった自然環境とその上に展開する動植物の生態環境、これらが生み出す生態資源をいかに有効に利用していくかは、民族の歴史のなかで生きる知恵というべき生活技術のなかで実現されてきたとあってよい。

調査班の中で、風間さんは主にカシュガルやホータン地方のウイグル族の楽器作り職人を訪ね、その製作過程、伝統音楽を演じる民衆楽師（伝統弦楽器奏者、定期市を回遊する乞食歌謡者など）の生活史を聞き込み、彼らの演奏を映像や音符で記録し、また、自らウイグル楽師から演奏技法を楽しそうに習っていた。

ウイグル族は歌舞に優れ、12ムカームに代表されるようなウイグル音楽を生み出している。農家のブドウ棚の下で、イスラム聖者廟の前で、また、定期市の広場でと、どこでも彼らはラヴァーブ弦楽器を片手に音を紡ぎ出していた。こういった光景は理屈抜きに楽しい。と同時に、民族音楽は民衆の魂の息吹を直接にこちらの魂に伝えるすごい伝達手段だと感じ入った。

多田、新納、それに原の3人は、カシュガルやホータン地方のオアシス農村を訪ね、米作、麦作、綿作など生産現場を見、垂直軸の製粉水車、氷室、牛が牽く菜種の搾油、桑材を原料とする手漉き紙、フェルト作り、絹織物、パン焼き竈、ピラフ、ラグマン（ウイグル式手打ち麺）、素焼き壺などの民衆生活技術や生産・生活用具などを観察、記録することに忙しかった。

これらの伝統的な生産と生活用具を交換する場として定期市が存在し、それが大いに活況を呈していたのには驚いた。カシュガルやホータンのような都市では日曜市が開かれ、生産用具や生活用品、肉や野菜などの食料品、それに家畜市もたち、その日は近郊農村からロバ車に揺られて人々が大挙して押し寄せてくる。

おもしろいのは、こうした都市の日曜市のほかに、人口5000人から1万人前後ぐらいの郷レベルの中心町に曜日ごとにたつ週市である。それはオアシスの農民たちの生活に密着した近郊農村を網の目状に覆う定期市である。

例えば、ホータン地方では、ホータンの日曜市を中心にして、火曜日はバクチェ郷（ホータンから約7km）、水曜日はユーロンカシュ郷（約7km）、木曜日はラスクイー郷（約9km）、金曜日はブザク郷（約25km）というふうに円心状に曜日と場所を変えながら市が開催されている。それにともない、売り手、買い手、仲買人、商人、乞食歌謡者、女や子どもたち、すなわち、ヒト、モノ、カネ、情報と人間活動に関係するすべてが、その中心点を変えながら動いているのである。

市に行くと生活に必要なものなら何でも

ある。肉、魚、野菜、パン、ピラフ、ラグマンなどの食料、衣料、伝統医薬、農具、鍛冶、木工品、陶器、生産用具などあげだしたらきりが無い。また、大道芸人や巡回楽師もやってくる。乞食も、税の取り立て役人もそれに警察もやってくる。朝と夕方は、市にやって来るロバ車の大群で道は溢れ出す。ここではロバが最も重要な交通手段だ。

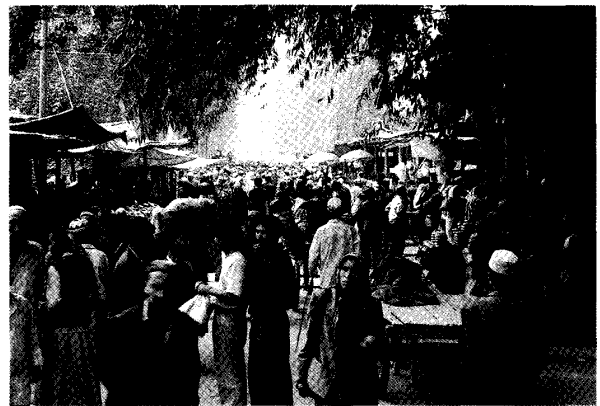


写真2 ホータン近郊のバクチェ郷の火曜日市(2000年夏)

こうした郷レベルで開催される週市は、異なった生産物の交換といった功利的な目的のほかに人と人が出会う場所、楽しみ場所という意味合いが強いように感じられた。とりわけ、イスラムの規制下にある女たちにとっては堂々と家の外に出られる日である。また、郷の中心地の近くには聖者廟があり、お参りという宗教行為の実践によって、心を癒す場所にもなっている。

私たちがフィールドワークの合間にこうした週市に立ち寄りたくなり、興奮してしまうのはどうしたことか。それは、市が人間の関心を引きつける根源的な魅惑を内包しているからだろう。市のポプラ並木の木陰で乾きを癒すカラチャイ（ウイグル式紅茶）を飲み、焼きたてのナンとトマト味のラグマン（ウイグル式スパゲティ）を食べ、食後にブドウやメロンを食べれば最高であ

る。近くで民族楽器でも鳴っていようものならじっとしてはられない。農家の軒先には、どの家でもフェルトが敷かれた土で作った大きな台座がある。その上に座っていると主人がブドウ棚から房をもいでくれる。オアシスの日陰は天国である。

河川オアシスはイラン高原などで見る地下水オアシスに比べて、めっぼう大きい。ホータン・オアシスでは、ポプラ材、伝統的な用具の材料になるクワ材、アンズ材、河川沿いの湿地帯に生育するアシ材などの植物が多く、伝統的な生活用具の原料や副原料となっており、まわりを沙漠に囲まれたオアシス生活を豊かにしている。

今、このように活況を呈している日曜市や週市などの定期市であるが、これからどうなるのだろうか。歴史的には、一時的に膨らんだ現象なのだろうか。

かつての共産主義の規制が強かった時代でも定期市は細々と営まれていたという。1979年以降の解放政策によって、農民たちによる市が復活し今日見られるような盛況となった。他方、2000年の夏にカシュガルを5年ぶりに再訪すると、鉄道駅が開通し

中央と直結し、道路幅は拡張され、旧市街の泥の家は壊されて新しいビルに建て替えられていた。街の一等地は漢族が占め、西欧風イミテーションである高級店が出現した。マクロの中国式市場経済とミクロのウイグル式定期市が併存する一種の二重経済であって、両者が同時に活況を呈しているのが現在のカシュガルの状況である。

2001年夏、テレビ番組は西部地域大開発、WTO加盟など漢族式グローバリゼーションの宣伝で満ちあふれていた。この大きな現代化の波にウイグル民族は飲み込まれてしまうのだろうか。今日見る定期市の活況は歴史的な一瞬のできごとなのか。

2001年の9月11日をカシュガルで迎えた。それ以前から、ウイグル民族意識とイスラム宗教意識が強く混じり合ったウイグル族の友人の一人から、漢族や中央政府に対する反発、東トルキスタン独立抵抗運動の話は何度も聞かされていた。中国にとっての辺境の地カシュガルから見ると、今をときめく北京や上海は、ちょうどグローバリゼーションの本拠地であるニューヨークと同じように巨大で眩しく光輝いて見えた。